

高桑史子教授退職記念

高桑史子先生のひと業績

綾部 真雄

高桑先生に初めてお会いしたのは、1989年のことである。確か、社会人類学研究会にお招きしたのだと記憶している。当時の私は東京都立大学の社会人類学研究室に進学したばかりの修士課程の大学院生であり、一方の高桑先生は、スリランカのコロンボ大学を拠点とした御研究を終えられて帰国し、いくつかの大学で非常勤講師をされていた。右も左もわからぬまま、将来への漠然とした不安を抱えながら人類学の基礎を学んでいた自分とは対照的に、笑顔を決やさず澁刺と御自分の研究を語る先生の姿をまぶしく眺めていたことを昨日のこのように思い出す。まさか後に先生と同僚になるとは、その時には想像もし得なかった。2007年から首都大学東京へ着任した私をもっと驚かせたのは、20年近くの時を経た邂逅であつたにもかかわらず、高桑先生の印象が当時と全く変わっていなかったことである。歯の浮くような美辞を並べようという気は微塵もない。文字通り、全く変わっていなかったのである。

それからさらに8年余りの月日が流れた。此の間、私は高桑先生のちょっとした所作や研究者・教育者としての態度から様々なことを学んだ。いつも飄々とされており、発する言葉は常にさりげないユーモアや風刺を含んでいる。自らの苦労話を好んで人と共有する方ではないが、他人の窮状にはほとんど温かい態度を示される。学生指導に向ける時間と情熱でも、先生の右に出るものはそうはいない。学生を伴って国内調査や研修旅行に赴いた回数は、研究室の教員内では群を抜くだろう。故にいつも不在がちである。気が付くと鹿児島県の甕島や伊豆七島の利島、はたまた関西や中越地方からメールが送られてきて、会議の欠席を詫びていらっしやる。この軽やかさは一体どこから来るのか。

あたかも時が止まったかのような高桑先生の涼しげな御様子は今なお健在だが、2015年3月を以て、先生はいよいよ御退職の時を迎えられることとなった。この機会をとらえ、同僚として知り得た高桑先生の学問的軌跡について少し綴ってみたい。

高桑先生と言えば「海」に関するイメージが強い。御自分の専門領域を「海村研究」、「海事人類学」などとして括られていることからわかるように、海は確実に先生の研究上の核をなすものである。瀬戸内海を臨む兵庫県西宮市で生まれ育ったことが、そのようなアイデンティティ形成を促したであろうことは想像に難くない。ただし、「静かな内海よりも、その外に広がっているはずの荒々しい外海への憧憬が強かった」と自ら述懐されているように、海は単なる原風景であるというよりは、少女を未だ見ぬ異世界へと誘う、想像力の

受け皿でもあったようである。

先生の学問的道程は必ずしも海から始まったわけではなかった。高校卒業後、早稲田大学第一文学部へと進学された高桑先生が選んだのは東洋史であり、シルクロード、とりわけ西トルキスタンへの強い憧れを持っていた先生は、いつか同地を訪れることを夢見て、入学後しばらくの間はロシア語の学習に明け暮れていたという。そのような折、ある機会に渡航した沖縄が先生を再び海に引き戻す。復帰前の沖縄、そしてふと訪れた鳩間島という八重山諸島のなかの面積1平方キロメートルにも満たない小さな島が、その後の研究の方向性を決定づける。卒業論文も鳩間島の祖先祭祀について執筆した。しかしながら、この時の鳩間島での調査は若干消化不良に終わったようである。海、なかでも漁村に対する憧憬を抱きつつ同島を選んだにもかかわらず、鳩間島での漁業は当時すでに大きく衰退しており、必ずしも期待通りの成果を得ることはできなかった。

大学院進学に際しては、沖縄の親族研究で名高い明治大学の蒲生正男先生の門戸を叩き、その後も南西諸島研究を精力的に続けていかれる。なかでも、当時の沖縄研究者の間で一躍脚光を浴びていた系譜の見直し作業、あるいは「シジタダシ（筋正し）」にまつわる批判的検討は、後発の研究者からもしばしば引用されるスタンダードとして名高い。一方、漁村研究への捨てがたい思いはその後先生のなかでくすぶり続け、博士後期課程に進んでからはさらに思いが募っていった。そこで先生はいったん視点を外国に移す。いくつかあった候補の中から最終的に絞り込んだのがスリランカの漁村であった。周知のように、スリランカは東西の文化をつないだ海上の要衝の一つである。中央アジアから沖縄へ、さらに南アジアのスリランカへという関心の推移は一見飛躍のようにみえるかもしれないが、先生によれば、陸のシルクロードへの思いが海のシルクロードに移行したに過ぎず、そこには明確な一貫性があるという。なかでも先生の関心をとらえて離さなかったのが、スリランカにおける漁村の特殊な存在様態である。農地を持たず、モンスーンにあわせて移動をするというスリランカの漁村がとても魅力的な調査対象に思えたようだ。

先生がスリランカ研究を志された1980年代初頭は、内戦の不穏な空気が全土を包み始めた頃にあたり、すでに北部では散発的な銃撃戦が始まっていた。海のシルクロードを念頭に置いた研究に従事するのであれば、本来はかつての港市の名残を今にとどめる北部地域の漁村を選ぶのが望ましかった。だが、戦乱による危険を避け、先生はあえて南岸のある漁村を調査地に定める。言わば消去法的選択であったが、この選択こそが先生が後に災害研究に着手される契機を作ったと言えなくもない。恣意的なはずの選択の連鎖は、時にある種の必然を生み落とす。

スリランカから帰国された高桑先生は、国際基督教大学の助手（1986-1988）、多くの大学の非常勤講師を歴任された後、1997年に東京都立短期大学文化国際学科に助教授として着任される（2000年に教授）。さらに2005年には、都立系四大学の統合によって首都大学東京大学院社会科学部研究科に教授として着任されて現在に至る。なお特筆すべきは、この間に高桑先生が新たに鹿児島県甕島の調査に着手されたことである。先生は、甕島の漁

民の家族構造の変化を定点観測的に追いかけるこの作業を、1980年代後半からすでに20年以上に亘って続けられており、沖縄研究、スリランカ研究に続く新たなライフワークとなっていることが窺える。

私見では、明治大学の大学院へ進まれて以降の先生は、研究者としてのキャリア形成にまつわって3つの大きな出来事を経験されている。一つ目の出来事は、指導教授であった蒲生正男先生のあまりにも早すぎる逝去（1981年）である。54歳という研究者として油の乗り切った時期に亡くなられた蒲生先生は、日本民族学会会長にも就任されたことのある、学会内でも大きな影響力を持った人類学者であった。一部の口さがない人々は、蒲生先生という羅針盤を失った、将来を囑望されていた若手研究者らを「蒲生遺児」などとも呼んでいたが、当時の高桑先生はまさにその筆頭であった。その後、さほど間を置かずして先生がスリランカ漁村研究に着手されたのも、恩師の死とけっして無関係ではないだろう。蒲生先生との別離は、それまで一心不乱に打ち込んでこられた南西諸島研究と一時的に距離を置く契機ともなったようである。

二つ目は、2004年のインド洋大津波（スマトラ沖地震）である。先生が長らく調査に従事されてきた地域はスリランカの南岸に位置し、津波による甚大な被害を受けた地域の一つでもあった。現地の多くの漁村もまた壊滅的なダメージを被り、復興支援とは無縁の単なる学問的関心を追求できる雰囲気はしばらくの間容易には戻ってこなかった。そうしたなか、先生が所謂「災害研究」の途に足を踏み入れて行かれたのは半ば必然の流れである。折しもリスクや災害に関する研究が、人類学を公共性と架橋するものとして世界的に注目を集め始めていた時期でもあり、これ以降現在に至るまで、高桑先生の研究者としての視点は常に、現地漁村の復興や復興支援をめぐる社会的プロセスに向けられてきた。

三つ目は、インド洋大津波の翌年にあたる2005年の都立系四大学の統合、あるいは首都大学東京の開学である。高桑先生が9年間に亘って教鞭をとってこられた東京都立短期大学もまた、このプロセスのなかで首都大学東京に組み入れられる。この結果として高桑先生は社会人類学研究室に着任されることになるが、身の処し方を自分で決められる立場になかった御本人にしてみれば、忸怩たる思いもあったのではないかと推察される。しかし、社会人類学研究室にしてみればもっけの幸いであった。日本研究と南アジア研究の双方に長けた強力なスタッフを新たに迎え入れることができたのだから。

最後に、高桑先生の御業績にも少しだけ触れておく。ただし、僅かな紙幅で高桑先生の御研究の膨大な蓄積を総括するという愚挙は避け、先生の学問的態度を顕著に反映した言葉をいくつか紹介するにとどめる。ここまで駆け足で眺めてきたように、高桑先生のこれまでの御研究は、地域としては沖縄県の鳩間島、鹿児島県の甬島、スリランカ南岸の漁村を中心に展開されてきた。鳩間島では、先の「シジタダシ」に代表されるような系譜観の変遷の批判的検討を試みられ、甬島では、時代毎の社会変動に呼応した家族構造の変化を丹念に追い求められてこられた。また、30年に及ぶスリランカの漁村研究においては、最

初の 20 年は主として漁村の移動パターン、国家の開発政策とも連動したジェンダーや宗教にまつわる社会変化を同時代的に活写することに力を注がれ、2004 年以降の 10 年はもっぱら、大災害後の復興もしくは生活再建の過程で、信仰や親族ネットワークがいかに漁村のリジリエンスを担保しうるのかを論じてこられた。御研究の射程は実に広範囲にわたるが、一方でその視線は常に家族や親族といった“小さな社会”を捉えて離さない。高桑先生が根っからの社会人類学者であることがわかる。

シジタダシをめぐる以下の見解は、高桑先生の社会人類学者としてのスタンスをよく表しているので少し長めに引いておく。

シジタダシという行為は、多くの沖縄研究者達の目をひきつけており、事例研究や考察が進んでいる。しかしながらその一方で、過疎化、経済的变化にともなう村落社会の変質が進み、家族の独立性が高まる中で、これらの研究は社会集団の研究としての成立が不可能となっている。個々の個別的な事例を追ひ、これらの事例の蓄積から理論を抽出する方法は、当然ながらたとえ一事例であっても社会の価値を反映したものとして考察の対象になりえるが、村落社会という社会単位での把握にはほど遠い。伝統社会の崩壊という現象の中で、今後、人類学はますます個人、個々の家族という個別的な事例を追うことが増加していくだろうが、個別事例の深化だけでは限界があり、一連の動きをみることで、その背後や根底にある文化を理解するという利点はあるものの、そのような一連の動きを全く行わない人びともいるという事実も忘れてはならない。ある社会を総体としてとらえる方向とその分析方法を今後も模索し続けなければならないだろう。（「第 9 章 鳩間島の家族と系譜観の変遷」『東アジアの文化人類学』（大胡欽一・高桑史子・山内健治編著）、八千代出版、1991 年、256-257 頁）

このような社会人類学的な分析単位の狭小化をめぐる問題意識は、甑島の家族をめぐる後の研究にも如実に受け継がれている。

過疎化はそこに住む人々にとってムラつまり地域の危機であり、転出者にとってはムラの危機は自分自身のアイデンティティの基盤がなくなることへの危機感である。しかし、それは家族の危機ではない。地縁と結びつく意義を失っても家族はムラを超越して存在し続ける。（「甑島における家族の可動性—その構造と変化—」『変貌する東アジアの家族』（佐藤康行、清水浩昭、木佐木哲朗編）、早稲田大学出版部、2004 年、194 頁）

スリランカをめぐる論考は数多くあるが、やはり代表作を敢えてひとつだけ挙げるとすれば、博士論文をベースとした大著『スリランカ海村の民族誌—開発・内線・津波と人々の生活—』（明石書店、2008 年）であろう。この浩瀚な著作は、国家の開発政策に翻弄さ

れたのみならず、内戦と津波という二つのカタストロフィを乗り越えていった海村の生活変化を 20 年に亘って見守り続けた民族誌的細密画である。高桑先生のスリランカ海村を見つめる視点は、序論における次の記述に顕著である。

海域に住む人々は、海や浜を生産の場に加えて、海上交易によって異世界とつながり、農地所有を基盤とする社会とは異なる構造原理による社会を構成し、多数民族あるいは支配勢力と相互依存の関係を有しつつも、その支配秩序の枠外にあってきたとされてきた。このような海域社会が国家の規範と秩序に組み込まれ、水産産業振興や開発政策の対象となることによって、どのような変貌を遂げてきたのかを考察することが海村研究には求められている。(14 頁)

だが、この文章は津波以前の博士論文提出時に執筆されたものであり、津波の発生はこの前提を大きく揺り動かすことになる。博士論文の脱稿から同書の刊行までに、津波に関する記述も加筆や補遺というかたちで盛り込まれるが、復興過程をめぐる本格的な論考が上梓されるまでにはもう少し時間を要する。こうして世に問われた論考のなかでも特に興味深いのが、「浜の仏陀像とカーリー女神像」と題された、以前、本誌『人文学報』に掲載された論文である。復興の過程において見えにくい部分で、しかし確実に重要な役割を果たした信仰とアイコンの存在を顕在化させた同論文は、カタストロフィの前で思考停止してしまいがちな人文科学を優しく叱咤するかのようである。

災害が生じるとそれに対して適応が行われるとともに、またそれに関連して文化の変化を引き起こす力が起動される。つまり災害は文化変容を引き起こす大きな要因なのである。大規模自然災害は社会を根底から覆すが、生存者は次のステップとして、自らの体験をふまえて新たな人間関係や集団を築きあげ、新しい人生を開始しようとする。これは復興政策と相互に関連しながら様々な個々人の動きとなって顕在化する。
(「浜の仏陀像とカーリー女神像—インド洋津波後のスリランカ南岸村の変化—」『人文学報』第 453 号、2012 年、1 頁)

自らの学問に対する揺るぎない肯定が、研究者としてのみならず、教育者としての資質をも左右するのは言うまでもない。指導教授の死やフィールドの半消失といった幾多の地殻変動を経験されながらも、高桑先生の社会人類学という学問への思いが枯渇することはついぞなく、先生を突き動かしてきたロマンは流麗な文章の合間に見え隠れする。学生達もまたこれを即座に感得する。先生の下には多くの学生が集まり、また多くの学生が学位と充足感を胸に巣立っていった。自らが心から楽しむことが、何にも勝る教育効果を生み出すという範がここにはある。

かりゆしウェアを颯爽と着こなし、廊下を軽やかに歩く先生のお姿を見かける機会が減

るのは実に寂しい。だが先生にとっては、長いサバティカルを得られるようなものかもしれない。未完のライフワークに割くことができる時間も増えるだろう。目下われわれにできるのは、このように割り切って喪失感をやり過ごすことだけである。

高桑史子略歴

1949 年、兵庫県西宮市生まれ

学歴

- 1973 年 3 月 早稲田大学第一文学部卒業
- 1974 年 4 月 明治大学大学院政治経済研究科政治学専攻修士課程入学
- 1977 年 3 月 明治大学大学院政治経済研究科政治学専攻修士課程修了
- 1977 年 4 月 明治大学大学院政治経済研究科政治学専攻博士後期課程入学
- 1984 年 10 月 スリランカ・コロombo大学人文学部社会学専攻大学院研究生（至翌年 10 月）
- 1985 年 3 月 明治大学大学院政治経済研究科政治学専攻博士後期課程単位取得満期退学
- 2005 年 2 月 博士（社会人類学）、東京都立大学社会科学研究所科

職歴

- 1986 年 4 月 国際基督教大学教養学部社会科学科助手
- 1991 年 9 月 スリランカ・ルヌフ大学人文科学部客員研究員（至同年 10 月）
- 1997 年 4 月 東京都立短期大学文化国際学科助教授
- 2000 年 4 月 東京都立短期大学文化国際学科教授
- 2005 年 4 月 首都大学東京都市教養学部人文・社会系（大学院社会科学研究所）教授
- 2015 年 3 月 退職予定

その他の活動

非常勤講師：千葉県立衛生短期大学、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京都立大学人文学部、明治大学政治経済学部・文学部、国際基督教大学教養学部社会科学科、放送大学、武蔵丘短期大学、茨城大学教養学部、山形大学人文学部

都民カレッジ講師、東京都立短期大学公開講座担当、東京都江東区、中央区、目黒区、千葉県浦安市、鹿児島県薩摩郡下飯村公開講座講師、国際交流基金アジア理解講座講師、国際協力事業団漁業協同組合インテンシブコース講師、国際協力事業団スリランカ漁民生活調査基礎調査団、大阪刑務所・府中刑務所国際対策室所属シンハラ語翻訳担当業務、スリランカ復興開発 NGO ネットワーク、スリランカにタコノギを植える会、首都大学東京生

活協同組合理事長

業績表

単著

- 『スリランカ海村社会の女性たち—文化人類学の視点から—』八千代出版、2004年
『スリランカ海村の民族誌—内戦・開発・津波—』明石書店、2008年

共編著

- 『東アジアの文化人類学』（大胡欽一・山内健治）八千代出版、1991年
『スリランカ 人々の暮らしを訪ねて』（渋谷利雄）段段社、2003年
『スリランカを知るための58章』（杉本良男・鈴木晋介）、明石書店、2013年

共著

- 『コロンボと西海岸』『もっと知りたいスリランカ』（杉本良男編）弘文堂、1987年
「つくられた「離島」—甌島浦内地区の構造と変化—」『社会人類学からみた日本』（村武精一・大胡欽一編）、河出書房新社、1993年
「家族と婚姻」『生活文化論—文化人類学の視点から—』（河合利光編）、建帛社、1995年
「漁民？商人？—スリランカの Karava カースト—」『海人の世界』（秋道智彌編）、同文館出版、1998年
「女性が支える漁民の暮らし—漁村の生活—」「保護されるもの、豊穡をもたらすもの—女性の性—」「配偶者選びから結婚まで—結婚—」「服飾—服飾文化の多様性—服飾—」『アジア読本スリランカ』（杉本良男編）、河出書房新社、1998年
「スリランカ海村社会のジェンダー—女性の労働と男性の労働—」『アジア世界 その構造と原義を求めて』（大胡欽一編）八千代出版、1998年
「仏教徒海村社会の女性」、「南岸漁村の「開発」と女性の労働」『スリランカの女性・開発・民族意識（国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズⅠ）』（大森元吉編）、明石書店、1999年
「水産業」「民俗」『下甌村郷土誌』（下甌村郷土誌編纂委員会編纂）、2004年
「海と人々とののかかわり方」「海がもたらす恵み—海の信仰」『海のプロフェッショナル② 楽しい海の世界への扉』（窪川かおる編）、東海大学出版会、2013年
「スリランカにおける二つのカタストロフィと向き合う—内戦と津波の経験から—」『カタストロフィと人文学』（西山雄二編）、2014年

主要学術論文

- 「cognatic 社会における「祖先」観—琉球の祖先崇拜について—」『明治大学大学院紀要第

15 集政治経済学篇』、1997 年

「民族学からみた沖縄研究の概観とその展望」『南島史学』11号、1972年

「養取慣行の民俗学的研究—白山麓山村社会における「家」の展開と村落構造 I—」『石川県白山自然保護センター研究報告』4号、1978年

「八重山鳩間島における信仰体系と系譜観の変化—過疎化社会における信仰生活の実態—」『社』X-3・4号、1979年

「八重山—島嶼社会における系譜意識の変化—過疎化による社会変化の一側面—」

『民族学研究』47巻2号、1982年

「スリランカシンハリ人社会研究序説 —Karava カーストについて—」『明治大学大学院紀要第20集政治経済学篇』1983年

「スリランカのシンハラ漁民社会概観—Alexander,Pの研究から—」『南島史学』23号、1984年

「海と漁民—スリランカ南部漁村ダクヌガマの事例から—」『ふいんど』創刊号、1986年

「スリランカ南部沿岸漁民のムラと家族」『明治大学社会・人類学会年報』1号、1987年

「スリランカ南部漁村の魚商人—漁民から魚商へ—」『社会人類学年報』Vol.14、1988年

「ニックネームにみられるスリランカ漁民の仏教的価値観と個人の類別」『明治大学社会・人類学会年報』2号

「漁船の動力化と村落開発—スリランカ漁村の実態—」『ふいんど』第3号、1989年

「「稼ぐ」妻と「稼げぬ」夫 —スリランカ漁村の女性—」『ふいんど』第4号、1989年

「アペーパンサラ！（我々の寺）—スリランカ南部漁村における寺院の役割と機能—」『明治大学社会・人類学会年報』3号、1989年

「幸運な男と有能な妻—スリランカ南岸村の家族—」『法政人類学』No.50、1992年

「沖縄文化の記述と理解—“異文化”理解をめぐる一考察—」『異文化コミュニケーション研究』第5号、1993年

「移動する漁民—スリランカ漁民の移動パターンの変遷—」『文化国際研究』第2巻、1998年

「スリランカ仏教徒漁村の女性」『社会科学ジャーナル』37号、1998年

「わが国における地域社会の解体と再生—甕島漁民の移動・移住・Uターン—」『国際交流及び多元的文化共生の現状と課題（1997年度東京都立短期大学特定研究経過報告書）』1998年

「沖縄・南西諸島の地域関係と文化変容—グローバル化とローカル化の狭間で—」『環太平洋圏における地域関係と文化変容（1998年度東京都立短期大学特定研究経過報告書）』、1999年

「「地域文化」の発見と再生—沖縄県・八重山と鹿児島県 薩摩郡甕島の事例から—」『現代文化に関する国際的・学際的研究（1999年度東京都立短期大学特定研究経過報告書）』、2000年

- 「南日本海村社会における海の信仰と世界観」『文化国際研究』第5巻、2001年
- 「スリランカ食文化における香辛料使用の変遷に関する試論—社会変化とジェンダーの視点から—」『文化国際研究』第6巻、2002年
- 「下甌における戦後の漁業振興」『下甌文化』第6号、2003年
- 「「異文化」で暮らすということ—食生活からみる在日スリランカ人のアイデンティティー—
『東京都在留外国人家族の食生活上の問題と日本食受容に関する研究（2002年度東京都立短期大学特定研究経過報告書）』、2003年
- 「甌島漁村における家族の可動性—その構造と変化—」『変貌する東アジアの家族』（シリーズ比較家族第III期2）（比較家族史学会監修）、2004年
- 「スリランカ仏教徒のムラに見られる共食と食の接待」『世界の宴会—「宴会」なくして「社会」ありやいなや（アジア遊学61）』（渡邊欣雄編）、2004年
- 「人災・天災と地域社会—スリランカ海村における紛争と津波災害からの復興に向けての諸課題」『文化国際研究』第10巻、2005年
- 「Socio-Cultural Impacts and Responses in the Sri Lanka Southern Coastal Area」
『2004年スマトラ島沖地震津波災害後の全体像の解明』（平成16年度科学研究費補助金（特別研究促進費）研究成果報告書、2005年
- 「スリランカ海村における災害をめぐる人類学的課題—内戦後の復興から津波災害を経て—」『社会人類学年報』Vol.32、2006年
- 「島嶼社会再生の原動力となる高齢者たち—鹿児島県甌島の多忙かつ多様な高齢者の活動—」『高齢化社会から熟年社会—都市形成過程における高齢者の多様化とそのセーフティネットワークの構築—II（平成19年度首都大学東京傾斜研究費成果報告書）』、2008年
- 「津波被災住民と仏教寺院—スリランカ南岸村の事例から—」『パリー学仏教文化学』第22号、2008年
- 「スリランカ海村の人々」『季刊 民族学』133、2010年
- 「インド洋津波復興の課題：スリランカ南岸の事例から」『災害復興と防災に向けて』（首都大学東京人文科学研究科社会人類学専攻 2001年度高桑ゼミ論集）、2010年
- 「石垣島の多様な高齢者たち—シマンチュとナイチャーがつくる八重山世—」『東アジアにおける高齢者のセーフティネットワーク構築に向けての社会人類学的研究』（平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究B（1）研究成果報告）、2010年
- 「浜の仏陀像とカーリー女神像：インド洋地震津波後のスリランカ南岸村の変化」『人文学報 社会人類学分野5』453、2010年
- 「日本に住むスリランカ人のインフォーマルネットワークの構築（篠田粧子と共著）」『多文化都市と新相互行為圏（NIZ）の形成 新しい「国際移動センター」構築に向けた研究』（伊藤眞編）、2013年
- 「スリランカにおけるインド洋地震津波災害からの復興—内戦終了後の生活再建—」『大規

模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究』(平成 20 年度～平成 24 年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究成果報告)、2013 年
 「津波と内戦後の漁業の現状と課題」『内戦後のスリランカ経済』(アジア経済研究所 2013 年度調査研究報告書) 荒井悦代編、2014 年

その他

「鳩間島の鯉漁と灰盗み」『西郊民俗』74号、1976年
 「カタルワ」『漁村生活向上(スリランカ)基礎調査団報告書』国際協力事業団、1994年
 「足入れ婚」「妻問い婚」「妻方居住」『事典 家族』弘文堂、1996年
 「スリランカ人と動物—ムラの生活から—」『歴博』89号、1998年
 「アシャギ」「シジタダシ」『日本民俗大事典』吉川弘文館、1999年
 「カラーワ」「サラ—ガマ」『世界民族時点』、弘文堂、2000年
 「海」「養殖」「海開き」『八重山生活誌』『八重山民俗誌』『シマクサラシ』『レーション』
 『沖縄民俗事典』吉川弘文館、2008年
 『地域開発の影響下における島嶼民俗文化の変容と持続』(文部省科学研究費補助金成果報告書平成9～11年度科学研究費補助金(基盤研究C(2)研究成果報告書)、2000年
 『スリランカの食文化・調理文化における香辛料使用の変遷—ジェンダーの視点から—』(山崎香辛料振興財団平成12年度助成研究報告書)
 『八重山島嶼社会における地域開発と民俗文化の再編』(文部省科学研究費補助金成果報告書平成12～14年度科学研究費補助金(基盤研究C(2)研究成果報告書)、2003年
 『西日本海域社会における漁民の移動と定住に関する研究』(文部科学省科学研究費補助金成果報告書平成15～17年度科学研究費補助金(基盤研究C(2)研究成果報告書)、2006年
 「多摩ニュータウンの高齢者たち—高齢者の集う場—」『高齢化社会から熟年社会へ—都市形成過程における高齢者の多様化とそのセーフティネットワークの構築—』(伊藤眞代表 平成18年度首都大学東京傾斜研究成果報告)、2007年
 『泉津の民俗—伊豆大島泉津地区調査実習報告書—』(小西公大・梅村絢美と共編)、(首都大学東京 特徴ある学外・体験型教育プログラム開発・実施のための全学的研究) 首都大学東京社会人類学研究室、2009年
 『伊豆利島調査報告—過疎・高齢化する東京における文化資源開発の可能性に関する基礎的研究—』(2008年度大学院高桑ゼミ調査報告集)(高桑史子編)、首都大学東京社会人類学研究室、2009年
 『瀬々野浦・内川内の民俗：薩摩川内市下甕町瀬々野浦地区・内川内地区』(学部 社会人類学演習報告書)(高桑史子編) 首都大学東京社会人類学研究室、2010年
 『伊原間にて：石垣島北部地区の現在』(大学院調査報告書)(高桑史子編著)、首都大学東

京社会人類学研究室、2010 年

『南西日本の過疎高齢海村における地域おこしと観光資源の開発に関する社会人類学的研究』（文部省科学研究費補助金成果報告書平成 20～22 年度科学研究費補助金（基盤研究 C（2））研究成果報告書）（PDF 版）、2011 年

『災害復興と防災に向けて』（2008 年度大学院高桑ゼミ調査報告集）（高桑史子編）、首都大学東京、2012 年